好き好き奉仕してくれた話

夜のカルデアをカーマがうろついていた事に理由はない。魔王としての側面が強い成熟した女の身体をしていたことも、廊下が減光されるほど遅い時刻を選んだことも、なにか特別な理由があったわけではなかった。

ただ訳もなく舌打ちが漏れ出すほど苛立ってしまう確かな予感はあったから、とある部屋の前で自然と足が止まったときも、

（でしょうねぇ）

と一人でカーマは納得したものだ。

マシュ・キリエライトの部屋の扉はロックで閉ざされていて、内部から音のひとつも聞こえてはこない。だから片方の手のひらをカーマは扉に当てた。本来であれば来訪者が来たことを部屋の中に告げるはずの機能が備わっているのだが、

それはカーマによってキャンセルされていた。魔術的なシャッターも兼ねる扉に触れただけではあったが、彼女には中の様子が手に取るようにわかった。

もっともそれは、中で行われている行為がカーマにとって縁深いものだったからかもしれない。

「アッ、あっはッ……うぁ、かふぅ……ッ♡」

最後に向かって燃え上がりつつある官能で肌を桃色に染めたマシュが、男の下で嬌声をあげている。肉体の快楽に流されてというよりも、その男――カルデアのマスターに抱かれているために生まれる声だ。正常位で交わる彼女はマスターの腰へ遠慮がちに脚を絡ませ、しかし存分に張り出た大きな乳房を男の胸板へスリスリと擦りつけている。それがマスターの快感へつながることを本能的に知っているからだ。

「んちゅ、あむ、えろぉ……せんぱぁい……♡　ふぅッ、っちゅ……ちゅる……んっ、んぅっ、んちゅっ、ちゅぱぁ……れろ、れろれろぉ……」

もう何度目かもわからないキスでお互いに舌を絡ませ、ぐちゅぐちゅと音を鳴

らしあう。そのやりとりは拙いものだったが、しかし行き着く先がわかっている動かし方だった。すでに二人が幾度か身体を繋いでいることをカーマは察した。

「あっ、せんぱっ、そこ、っふぅ♡　ふぅ……あぁんッ、ぐり、ぐりしてくださ……いっ♡　いっ、ンッ、んっ、こすって、こすれてッ♡　あっ、あっ♡」

膣内を楽しむようにマスターは腰の動きを変え、ほじくってくる彼に合わせてマシュも太ももをくねらせた。ふたりの目と目が合い、どうすれば相手が悦ぶのか探っている。

じゅぷ。じゅぷ。

控えめな水音が接合部から聞こえていたが、やがてマシュが「んっ」という小さな声を出したタイミングで、マスターの動きが速まった。

「んぃッ！？　あっ……あっ、ぉお♡　はぁッ、く、あっ、あはぁ……♡　あぉっ、ん、んッ、あぁ、あぁんッ、あっ♡」

マシュの声が変わる場所をマスターは入念に掘っていく。膣の上側にあるポイントを自分の肉棒でなぞり、不器用にグヌグヌと動かすと、たまに前後へ揺すっ

て調子を変えた。
「ああ……あぁッ……、あっ、あっ、ん……んッ♡　うぁ……んきゅ♡　そこばかり、せんぱい、せんぱい……あっはッ、あっ、あおッ、あッ」
　じんわりとした快感に流されながら、マシュは身体をより密着させようと手足を絡めた。腿も、腹も、胸も、汗でしっとりと湿っている。柔らかなマシュの膚にマスターの前面がぴたりと包まれるようで、小さく動くたび、すべすべとした肌ざわりがたまらない感触を残している。
「っひっ♡　あはぁ……あッはッ♡　あぁッ♡　ンッ♡　あぁっ、あっ♡」
　マシュの鼻で鳴く頻度が多くなっていき、お互いが相手の肉に沈むようにして強く絡み、まさぐった。荒い呼吸にあわせてマシュの膣がきゅっ、きゅっと絞られ、マスターの腰も円の動きから前後の動きへと変わっていく。より快楽を求めてのことか、もしくは無意識にか、マシュも腰を遠慮がちに振りはじめ、グチュッ、ヂュブッと淫らな音が大きく部屋に響きはじめる。秒ごとに快感が倍加していくマスターへ彼女が歓びの声を上げる。

「あぁッ、せんぱいっ……♡　もう、ンッ、イく、イき……♡　せんぱいっ♡」
マシュの甘い声色に遠慮が吹き飛んだ男は腰を猛然と動かし、相手の唇を強く吸った。男が夢中になってくれたことを喜びながら、マシュは口内へ押し込まれてきたマスターの舌をやさしく受け止めて舐め回し、できるかぎり腰を男の動きに合わせて揺すった。
「あんッ、ンッ、ん、あぁ♡　あっ♡　ああッ♡　アッ♡　んっ♡　くぅん♡」
腰と腰がぶつかり、ヌチャヌチャと間断なく水音がたてられる。腰にしびれるような快感が溜まって、マスターの肉棒がぷっくりと膨れていく。
「いっしょっ、はいっ、いっしょにっ♡♡　いぃっ♡♡　ふぅ〜っ、ふっ♡♡　ふぅ♡♡　んあっ、せんぱいっ♡♡　せんぱ、いっ♡♡」
上り詰めるのに備えて強くしがみつき、顔を紅潮させながらマシュは急速に快感を昂ぶらせていく。それに比例して膣圧が変わり、ペニスがきゅっ、きゅっと絞るように刺激された。このリズムに対応できず、限界を迎えかけたマスターはやみくもに腰を往復させ、女をざくざくと突いた。制御されていない本能の動き

がマシュの中で新鮮な爆発を生み、彼女もまた急激に果てた。
「あっ、イく、イく♡♡♡　あっ♡♡　〜〜〜〜〜〜〜っ……♡♡♡♡」
身体を強張らせながら、女が細い叫び声をかみ殺すしてように絶頂する。股間を突き出すようにしたマスターも射精し、膣内へ大量に精をほとばしらせていった。濁流を吐き出し、愛した女の体を強くかき抱いた。
カーマは扉から離れると一切の意識を部屋から断ち切って、どこに行くでもなく部屋から遠ざかっていった。なんのことはない。よくある愛のひとつだった。男と女。それもなるべくしてなったような、見どころのない、ありふれた愛。快楽を十分引き出す前の段階であり、お互いに試行錯誤と思いやりを繰りかえす未熟なセックス。
ひたむきに腰を振るマスターの姿は『もし彼がセックスするならば』とカーマの想像していたそのままで、いっそ呆れてしまうくらい彼のイメージ通りだった。
カーマは夢想したことがあるのだ。マスターのセックスを。マスターとのそれを。愛して堕落させる権能を持つためにあらゆる性技にも精通した彼女からすれ

ば、児戯にひとしい動きで自分と交歓を交わすものだろうとカーマは考えていた。
そして同時に、もし共寝をするのであれば、きっと彼は女を知らぬだろうから、自分が先導してあげなければならないだろうとも夢想していた。
カルデアからカーマが消えた。
次に彼女が立っていたのは己のみが存在し、己が全宇宙と同義になる空間だ。光の存在しない、地球とは理を別にするそこで無表情に漂うカーマだったが、やがて眉がゆっくりと引き絞られ、苦々しい表情へと変わっていった。
「じゃあ、もういいんですよね。我慢しなくてもいいって事ですよねぇ？」
誰も聞くことのない独り言をつぶやくなり瞬時に、カーマはマスターの部屋へと立っていた。マシュとの逢瀬からどれだけ時間が流れたものか、消灯された暗がりの中でマスターはベッドに横たわっている。周囲に他の者がいないことをカーマは確認した。多くのサーヴァントや守りに囲まれている普段ならこうはいかないだろう。マシュと逢い引きしていたことに配慮したものか、それとも偶然か。もしくはその両方かもしれない。

どちらにせよ今のカーマにとっては知ったことではなく、思いのまま彼を好き勝手に扱おうと決めてベッドに歩を進める。ふと、机の上に見知ったものが転がっているのが見えた。

「……はぁ？」

カーマの口からうろたえたような声が漏れる。それは花で作られた矢で、清潔な布の上にぽつりと置かれているのだった。

女の身体から燃えたつ蒼い炎が弱まり、消えていく。この矢はいつかの折に、気まぐれでマスターへ渡したものだったはずだ。わざわざ机の上に、それも見たところ簡素な手入れが常にされている様子。それに思うところがあったのだろうか、彼女の魔王としての部分が薄れていった。

カーマは指を振って扉のロックを少しばかり強化すると、音もなくベッドに入って男の横で添い寝をした。自らの内的宇宙にマスターを引きずり込み、堕落するまで愛し続ける気がすでに失せてしまった彼女はどうするか決めかね、獲物の胸板へ迷うように指を這わせる。

眠りに入ってすぐのマスターだったが、カーマの動きで目覚めそうな気配はない。魅惑的で豊かな胸をやんわりと押しつけ、みっちりと肉の張った太ももを男の足に絡ませながら、暗がりの中で彼女の顔はじっとマスターの寝顔を見つめていた。

「……ふん」

下腹部に伸ばされたカーマの手がさらに下へ動き、男の股間をまさぐる。するとひとりでにズボンがほどけて開き、意志を持ったかのように膝下まで滑っていった。パンツを同様に脱がせると、そのまま彼女の細い指がマスターの肉棒に添えられ、やさしく、やわやわと擦りはじめた。弱い刺激を繰り返すうちに、興奮の兆しが肉棒に萌えはじめていく。

少しだけカーマが身を起こすと、二人の体を覆っていた寝具もまた水で流れていくように脇へ寄せられ、部屋の中の照明がひとりでに、ゆっくり明るくなっていった。

股間の刺激のためか、あるいは明るさのためか。マスターが半ば覚醒し、寝ぼ

けて薄目を開けると、自分を見下ろすカーマと目が合った。
「へぇ。驚かないんですね」
いやに静かなカーマの声に、うん、と寝起きで邪気のない返事をしたあと、少し遅れてマスターの体が硬直した。状況を理解しつつある彼だったが、それでも性器の感覚には混乱しているのか目を泳がせている。
先ほどの生返事はカーマを信頼しているから、とりあえず口に出したものだったのだろう。彼女にはそれが解ってしまった。
「ふぅん？　いまさら驚いてるじゃないですか。ねぇ……さっきのは、どういう『うん』だったんですかぁ？」
口の端を吊り上げて嬲るような声音で問いかけるカーマだったが、口調とは裏腹に肉棒への刺激は柔らかく、それでいて完璧な丁寧さを用いてゆっくりとした快感を与えていた。空いている方の手でマスターの服のボタンが外され、ズボンと同じように軽やかに、脱がされる感触を残さぬ間に剥がされる。
「その顔。私が、花の矢をあげた時の顔……」

裸になったマスターの上半身を、カーマの指がなぞる。マスターと目を合わせながら、カーマは彼の乳首へそっと指先を置き、小さく擦りあわせた。
もう半ばまで勃ち起がったペニスを揉む彼女の指が、不意に動きを変える。やさしく揉み込むような動きが、ゆっくりと前後に動かされはじめ、しゅり、しゅりっと小さく音を立てて疼きを煽った。
ペニスをしごきながらカーマが亀頭を撫ではじめると、その刺激にマスターが身体を起こしかける。
『動いちゃダメですよ。マスターさん』
手で身体を支える格好になったところで後ろから誰かに抱きかかえられ、しかもその声が存外に子供っぽかったことにマスターは呆然とし、その声の持ち主に思い当たると目の前のカーマがニヤリと笑った。
「そうです。私ですよ。小さな私が後ろから支えてあげますから、マスターさんは安心して身体を委ねてください。ただ……」
赤黒い生殖器の先端をなぞるカーマの指と鈴口のあいだに、先走り液のねばつ

いた糸で橋が掛かった。
「もしかして、興奮しました？　小さい私の」
『この声を聞いて？』
耳元に吹きかけられるようにして幼い声を浴びせられ、男の首がすくむ。
「ねぇ？　どうなんですかマスターさん？　こっちの私も小さくなったほうがいいですか？」
ぐい、と顔を近づけたカーマとマスターの息が、互いの顔にかかる。薄ら笑いを浮かべていたカーマだったが、しばらくすると急に表情を失くし、鼻先が触れ合うまで近寄った。
「その顔。この期に及んでまだ『どうしてこんな事を？』なんて、考えてますね。いいんです。なぁんにも考えなくて、いいんですよ」
半開きになったカーマの唇が、ゆっくりとマスターの唇に重なろうとしていく。ふたりの瞳は相手をじっと見つめて離さず、そのまま唇が触れ合いそうになって――止まった。

カーマの眉が歪む。
女の顔がすい、と離れるが、ふたりはまだ見つめあったままだ。
「その顔……」
ぽつりと呟いたカーマは視線を外すと、マスターの肉体へ軽く愛撫を加えながら、ゆるゆると身を伏せて肉棒を咥えた。
「はむ……ちゅる……ん……」
手で擦っていた時よりもさらに緩慢な上下運動だったが、その刺激の強さはマスターの腰の奥に強い衝動を沸き立たせた。背後からカーマの分体に細い手足で、しかし人間離れした力で拘束されているマスターはろくに動けないまま、急速に射精欲が膨れ上がるのをなんとか遅らせようと目を閉じて深呼吸した。
それは手に取るようにしてカーマへ伝わり、不愉快になった彼女は目を細めて頬をくぼませる。。
「はぁ……へぅ、はむっ、レロレロッ、ぐちゅ、んぢゅるっ、ちゅるっ、ぢゅぷッ、べろッ……ちゅるちゅるッ、べろべろべろ」

カーマは容赦なくマスターのモノをしゃぶり、擦りあげ、唇でなぞった。すぼめた口腔内と肉棒が密着し、ぬめった温肉が圧迫感をもって彼をシゴいている。吸い上げられるごとに絡められた舌がじゅるじゅると巻きつき、きゅうきゅうと上下に絞った。

マスターの腰が跳ね、呼吸が乱れかけると後ろから耳へ舌が差し込まれた。

『くちゅる、べろ……ふふ、こっちも舐めてあげますね。ちゅるちゅるっ、ちゅう、ぷちゅっ、ちゅぅぅっ、れろれろ、れろぉ』

分体の小さく熱い舌がマスターの耳を蹂躙し、同時に未成熟な手指に似合わぬ妖艶な動きで彼の乳首を弄んだ。カリカリと掻き、つまみ、ひねる。淫らな快楽が男の背骨をくだり落ち、その奥に溜まっている射精への熱と混ざり合ってグツグツと高まっていく。

もがき跳ねて暴れようとする雄肉を包み込むカーマの頭は、容赦のない激しい口戯のためにゆさゆさと振られ、唇からあふれ落ちる唾液が陰嚢を伝ってシーツを濡らしていく。

「んぢゅくっ、ちゅぅ、んッ、じゅるるッ、ぢゅぷぢゅぷぢゅぷッ♡　べろッ、はぁっ……レロレロレロッ♡」

濡れた唇から抜かれた棒の先端をカーマが舌先でちろちろと舐め、唾液と先走り液のミックスで汚れるのもかまわず細い指でしごいた。ぬちゃぬちゃぬちゃ、と粘ついた音が室内に響く。射精に向かって昇りつめていたマスターは、いつのまにか分体からの愛撫も止まって余裕ができていたことに気づき、快感の余り閉じていたまぶたを開いた。

唇でやわやわと亀頭をついばんでいたカーマと目が合う。わざとゆるい愛撫をして待ち受けていた彼女が嗤った。

（イカせますね）

声に出さないカーマの意図をマスターが読み取った途端、反り返った剛直が一息に喉奥まで飲み込まれる。

「むっちゅ〜っ♡　ちゅっ、ちゅっ♡　ちゅるちゅる♡　ぢゅぷぅん♡　じゅぽじゅぽじゅぽっ♡　ぢゅるくッ♡　ちゅぽちゅぽちゅぽ♡」

強烈にしゃぶりたてられ、思わず精液を漏らしかけたマスターの肛門がきつく絞られると、追い打ちとばかりに分体の耳なめが再開される。
『ぐちゅ♡　ぢゅぷ♡　んふぅ♡　マスターさん、イってください♡　イって♡イって♡イって♡　ぐちゅ♡　ちゅる♡　れろれろれろ♡』
乳首も激しく、予測できない動きでこねられ、あっという間にマスターの射精欲が限界を越えた。男の口から声が漏れ、そこに含まれた諦めのニュアンスに、カーマは傲慢な光を目に宿した。
引き絞るように口をすぼめて、張り詰めた亀頭とカリ裏を舌でなぶりながら、熱く、熱く吸い付く。
喉奥近くまで男根を呑まれたところで限界を越えたマスターは、ついに精をほとばしらせた。
「んんッ！？　んッ♡　ん〜〜〜〜……♡　んくっ♡んくっ♡」
びゅくびゅくと脈動しながら精液を噴出する男根をしっかりと咥えて、カーマは口の中に溢れてくる熱液をこくこくと飲み下した。必要以上にペニスを刺激し

ないよう微動だにせず、男の腰に手を回して抱きしめ、丁重にさすりながら女はじっとしている。快感の中で朦朧とする感覚にマスターが身を委ねていられるように。その時間をできるだけ長引かせて邪魔しないように。

やがておしゃぶりを止めた彼女はゆっくりと頭を上げ、火照った顔のマスターと再び向き合った。官能の残り香をにじませている男の表情に気を良くしたカーマはふと、愛を与えるという行為に自分が満足していると思い至った。

それは小さからぬ謎、霊基に響く大きな動揺だった。愛を与えることに飽き飽きしているはずの自分が、今この時は満たされているという事実。それどころか、魔王としての側面を色濃く反映させて顕現している(炎こそ衰えてはいるものの)今の自分が、愛を？

自問に揺さぶられるカーマを知ってか知らずか、マスターも問いを口にした。

――どうしてこんな事を？

行為の前と同じ疑問を繰り返す愚かさに、機嫌の陰っていたカーマが噛みつこうとするより早く、マスターは続けた。

――カーマ、迷ってるよね？
「……はぁァ？」
寝込みを襲われ強引な奉仕に翻弄されてはいたものの、カーマの表情がふとした拍子に強ばるのを彼は見抜いていた。『いつかマスターを堕落させる』と豪語していた彼女が行動に移したのであれば、そのような顔をすることはないだろう。そもそも、やりたくないのであればやらない性格のはずだ。
事実としてカーマは迷っていた。やりたいことの理由を見つけられないまま、やりたいことを始めてしまったことに。そしてそれが、マスターにもバレている。彼女としては認めるわけにはいかなかった。
「マスターさん。私が誰だか忘れちゃってませんか？　私はマーラ。惑わせるもの。迷わせるものです」
精液と唾液でベタベタの、半勃ちになった男根にカーマの指が絡む。そのままにちゃにちゃと音を立て、あやすように手のひらで撫で回されていく。
「そんな存在が迷う？　冗談が下手なマスターさんですけど、これはとびきりで

すね。無明の底へ落とす時だろうと、導き手であれば確固たる道標を持ってるに決まってるじゃないですか。さっきマスターさんを……ふふ、情けなぁく射精させた手管もその一端です。好きでもない女の口に出させるというのは、存外に男の精神力を弱めるんですから。ふふ、ずいぶんと効いちゃって――」

――好きだ。

男の言葉にカーマが硬直した。動画を停止したように突然、ピタリと。ものを言いかけた半開きの唇も、得意げな目つきも、弄ぶためだけに動いていた手指も見事に固まった。マスターの背中を支えながら小さく嘲笑していた分体も、凍りついたように動きを止める。

やがて片方の眉だけピクピクと三日月のようにしならせ始めたカーマに、再度マスターは告げた。

――ちゃんと好きだよ。

「……チッ！」

彼の真摯な声に対してものすごい音の舌打ちを返したカーマは、両手で淫棒を

揉みしだき、巧みに熱くしていった。
「気持ちいいですか？　ほら、ここ、粘ついた指でカリ裏と裏筋を、ゆ〜っくり、ゆっくりなぞられると……。あーあ、また勃ってきてますよ？　もう、今日は何度も出したのに、まだがんばるんですか？　そろそろつらいですよね？　最初のあの娘に、たぁ〜っぷりと、出しましたもんね……？」
たぷんっとした乳の柔肉をわざと男の胸に擦り付けて、ふたたび唇と唇が触れそうな位置まで寄りかかると、カーマはマスターの顔を覗き込んだ。
「で？　誰が好きなんです？」
――カーマ。
間髪入れず返された名前に、カーマの顔がギチギチと歪む。それは多少の怒りと、何よりも少なくない喜び、そしてその両方を抑えるために無理やり顔の形を整えようとする努力のためだった。
再び準備の整った屹立へ指を巻き付けながら、カーマはマスターの太ももあたりまで身体を引いた。口を開けば取り返しのつかないこと言ってしまいそうな彼

女は相手を無視して、視線も合わせず一方的に丹念な愛撫を加えていく。
ちゅぷっ、にゅるにゅる、にゅこ、にゅこ、にゅこ……。
充血した亀頭をつまみ、それが十分な張りを備えたことを確認するとマスターの股間からカーマは手を引き、そのまま自らのたっぷりとした双乳の隙間に、ゆっくりと、ゆっくりと差し込んでいく。
にゅ……ぷぅ……っ。むにゅっ、ふにゅふにゅっ。
経験したことのない性質の快感で肉体を慄わせつつ、真っ白な乳房の谷間から自らのペニスの先端が覗いている淫らな光景に脳天が刺激され、マスターは頭がクラクラした。
二の腕でおっぱいを両脇から押し付けながら、カーマは小さく上下運動を始める。
たぱんっ、にゅぷっ、ばちゅんっ、たぱんっ。
表情は淡々としたまま、それでも刺激に飽きが来ないようカーマが強弱の調節を細やかにしているのは、奉仕を受けているマスターが一番良くわかっていた。

フェラの時と違って視覚からも彼を喜ばせているのは意識しているのだろう。そのいじらしさが彼の心をくすぐる。

雪のようにまぶしい肌が震え、圧倒的な量感となってマスターの骨盤の上で波打つ。ほどよい肉の熱と絹のような触りごこちが相まって、男の鼠径部あたりにジーンとした快感が滲んで広がっていく。カーマの胸部を覆っていた小さな装飾はいつの間にか取り払われており、いまでは愛らしい桜色の乳首がふるふると揺れるのを好きなだけ眺めることができた。

うねる乳肉を制御するカーマの腕は動かしやすいようにベッドへ両肘をつくような形になっていたが、普段の彼女らしからぬ脇を締めてバストを強調する媚態のように見えてしまい、マスターの喉が鳴った。

じんわり汗をかいてきたマスターの背中に、カーマの分体が肉付きの薄い身体を押しつけてきた。

『少し動かしますね』

小さな肉体がマスターの身体を支える力を強めて姿勢を調整させると、彼の両

腕が自由に動かせる格好となった。
『さぁ、それで好きなようにしてください』
分体のささやきが耳へ吹き込まれ、同時にマスターの乳首を後ろから指が引っかく。
『例えばですけど。眼の前の女の頭を鷲掴みにして、おちんぽを唇に突っ込むとかどうですかぁ？　さっきの、口でずぽずぽしてもらうの、良かったですよね？』
ぬちぬちぬちっ、ぶちゅっ、にゅぷっ、ぬちゅっ、たぱんたぱんっ、にゅぷっ、たぱんっ！
ずいぶんと強くなってきているカーマのパイズリの音を通り抜けるようにして、ソプラノの高い声が蠱惑的な提案をした。マスターの胸に送られる細やかな快楽が背骨を駆けぬけ、この小波に紐付けられたさっきのフェラチオが思い出されて彼の腰をぶるりと震わせた。
上下に弾ませていた大きな柔肉を、右へ、左へゆっくり振り動かしながら、カーマは首を下げ、にじみ出て小さな玉になっている先走り液へ舌を伸ばす。

「ふーっ〜〜……♪」
それから細く、長く息を吹きかけた。
明らかに焦らし、挑発してくるカーマへ向かってマスターの両手が伸びると、髪をかき分けるようにしてサーヴァントの頭をつかんだ。襲いかかってくる悦楽に耐えようと力のこもった男の手指の感触。女を道具のように使い、気持ちよくなるためのオスの動きに彼女はにんまり笑いながら、唾液で糸を引く唇をかぱりと開け――。
わしゃわしゃと、カーマは頭を撫でられた。
「……？　？？」
優しく、愛でるような手つきはカーマの予測したものとはほど遠く、もちろん性欲が混ざっている部分は多々あるものの、彼女への慈しみや感謝といった心の機微がわかるものだった。自分を気持ちよくしてくれていることへの愛おしさから、髪をやさしく梳き、カーマの頭を、頬を、おとがいを撫でていく。その肌触りの良さを存分に味わう様子を見せてから、マスターは赤く染まっていきつつあ

る彼女の耳を優しくつまみ、そこにも愛撫を加えていく。
「……ッ！　ぅ……！　～～～～～～っ！！！」
言葉にならぬ唸り声を上げると、ぽっくり膨れたマスターの亀頭へカーマは一息に吸い付いた。
ぐちゅっ♡　♡ちゅぽちゅぽっ♡　れろれろっ♡　じゅぷっ♡　ぷちゅっ♡
じゅぷっ♡　じゅぷっ♡　むっちゅ～っっ♡
凄まじいフェラチオの勢いにたまらずマスターがうめいたが、彼女は一顧だにせず気にもかけず、容赦ないチンポしゃぶりでペニスを舐めあげ、同時進行しているパイズリも乳圧をグンと上げて挟み込んでいった。
たぱんっ♡　にゅぷっ♡　ぬちゅっ♡　たぱんっ♡　ばちゅんっ♡　ぬちぬちぬち♡　たぱんったぱんっ♡　ぐぶぶ～っ……どちゅどちゅどちゅっ♡♡
激しい動きによって肉棒と唇の間から流れ落ちる唾液が、熱くなった雄棒の潤滑油として乳肉の谷間で利用され、泡立ちながら淫猥な匂いを立ち昇らせる。震えるマスターの手がいまだに加えてくる、この奉仕に見合わない穏やかな愛撫か

ら逃れようとするように、カーマは男を責め上げて躍動した。分体も乳首責めと耳舐めを開始する。

『れぅ♡　あぅ♡　べろべろっ♡　マスターさん、これ気に入っちゃったんですかぁ♡　べろ♡　えろえろえろ♡　ちゅぷぅ♡　お耳、気持ちいいですね♡　はぁ……れろ♡　ちゅるちゅるちゅるちゅるッ♡　ぢゅぷぅ♡』

マスターの手先がさらに強ばる。ペニスは玉袋の奥あたりまでガチガチになっているのがわかるし、その奥で渦巻いている肉欲の熱はすでにマグマのようになって放たれるのを待ち望んでいた。

カーマの頭を撫でることによって散らしていた射精へのガマンも限界が近く、足先がひっきりなしに痙攣を起こす。

ぢゅぷっ♡　むっちゅ〜っ♡　ぐちゅぐちゅぐちゅっ♡　んぢゅるっ♡　ちゅうっ♡　じゅるる〜〜〜っ♡　ちゅぽっ♡　れろれろっ♡

アツアツになったペニスの先っぽをカーマの舌先がなぞりあげ、吸われたと思えばカリ裏をしごかれる。マスターの腕に鳥肌が立ったのを見つけた分体が、は

じめて爪の先でカリカリとマスターの乳首を掻いた。
マスターの視界に白い光が走り、手がカーマの頭から離れた。もう漏らすまで秒読み段階だ。
（――ああ。そんなによかったんですか）
カーマの胸に小さな勝利の味と、よろこびが広がる。それを噛みしめる間を与えまいとするかのように、マスターの指が彼女の固くなっていた乳首をきゅっ、とつまんだ。
「んンッ！？　んんん～～～ッ♡　ふぁ♡　ちょ、そんな……あッ♡　んむ、ちゅ～ッ♡　んんん～～ッ♡♡」
急な性感にまぶたの裏をチカチカさせながらも、なんとかカーマは男根を舐め続けた。だがその嬌声までは抑えきれたものではなく、味をしめたのかマスターはしこり立った乳首を引っ張り、揉みしだき、乳輪を押すようになぞった。
「んふっ♡　ふぅーっ！♡　ふぅーっ！♡　ぐちゅッ♡　れろれろれろッ♡　んふーっ♡　んんんっ……♡　ちゅぅっ♡　ちゅるっ♡　あ……イっ……♡　んん

ん〜〜〜ッ♡♡　んぁッ♡♡　ぢゅぽっ♡　へぅ……♡　はむはむっ♡」
たぱんっ♡　ぬちぬちぬち♡　ぬちゅっ♡　ぐぶぶ〜っ♡　たぱんったぱんっ♡　たぷっ♡　ぐち、ぐちぃ……ぐちゅぐちゅっ♡　ぬちゅっ♡　ばちゅんっ♡
たぱんっ♡　たぱんっ♡
おっぱいの充血した先端をこね転がされながら、カーマは屹立を舌でねぶっていく。今では彼女の方も余裕は消え去り、すり合わされる胸乳のリズムはマスターから与えられる甘い快楽で乱されがちになっている。
男の肉棒が膨れあがり、睾丸が縮みだしたのをカーマは感じた。そしてまた同時に、自分の腹の奥がどうしようもなく熱く、蕩けていくのもわかった。これではまるで自分が乳首だけでエクスタシーを迎えるようであり、男を手玉に取るどころか不様ですらあった。恥辱と怒りで首から上を真っ赤にしながら、行き場のない感情でカーマは自分に言い訳をした。
（だって！　だって、しょうがないじゃない！　マスターに奉仕なんてしたら、応えられたら！　興奮するなんて当たり前じゃないですかぁ！）

鈴口から、小川のように先走りが流れ出してきた。射精の前触れに対して、カーマは唇をキュッとすぼめてさらに刺激を強め、舌を激しく乱雑に翻す。

我慢のしすぎで気が遠くなりそうになったマスターは、しかし快感の波をなんとか耐えようと脚をカーマの胴体に絡めつけ、ぐりぐりとピンクの乳粒を圧迫する。

よじって逃げることもできなくなったカーマの身体が跳ね、ちゅぽん、と糸を引いて唇が外れる。

「おっ、あっ、あッ♡♡　だめ……♡♡　イく♡♡　もぅッ……イッ、はッ、んん〜〜ッ♡♡」

最後の力を振り絞って、カーマはマスターの欲棒の先端を飲み込む。男はしごいていた桃色のしこりを、ギューッと肌へ埋めこむようにして潰した。同時に乳肉で思い切りぎゅっと締められた肉棒がついに弾け、カーマも同時に絶頂した。

「ん、んっ、ッ、んんんんん〜〜〜〜〜〜〜〜〜ッ♡」

びゅるるるっ〜〜〜〜〜♡　びゅ〜っ♡　びゅるびゅる〜〜〜〜〜〜ッ♡

びゅくっ♡　びゅくびゅくっ♡　びゅるびゅる♡　どびゅ……びゅっくんっ♡
どびゅ……♡　びゅくんっ……♡　ぴゅ……♡
昂ぶりきった情欲が数度の白塊を吐き出しても、なお濃厚な白濁がカーマの喉奥へ向けて送り出されていく。彼女の口内で灼熱のオス肉が脈動に合わせて新しい精液を次々と送りこむが、エクスタシーに震えるカーマは、緩みかけた口から雄液をこぼさないよう、指を使って弱々しく唇を塞ぐのが精一杯だった。
射精が終わり、甘ったるい快感が重く残る腰の余韻を楽しみながら、マスターはカーマの頭を撫でた。カーマは反応せず、ただ自分の中に渦巻く官能にだけ意識を向け、引いていく快楽の波をゆっくりと追っていった。
やがてカーマが正気に戻ると、マスターは仰向けに倒れて寝息を立てていた。すでに分体は消え、部屋には彼女だけが残されている。
そうして、すべてが夢であったかのようにカーマが部屋を片づけてしまうよりも前に。柔らかくなったマスターの愛棒を口から抜き出してしまうよりも前に。もごもごと何事か舌の上でつぶやきながら、意識のないマスターの手のひらにそ

っと、カーマは自分の手のひらを重ねた。